

「そうじ」について ②

前回に引き続き、「そうじ」という語に着目して、心の掃除・澄ますことについて考察していきたい。

七号では、親神が人々の胸の内の掃除を急ぐのは、万事をたすける親神の働きを見せたいがゆえであると歌われて、さらにこの話は他でもないそれぞれの「うち」の話だと論されている。この箇所では、27、30、32で「むねのうち」と表現されつつも、31では「銘々の“うち”の話や」と述べられており、「うち」という語にいくつかの意味合いが重ねられていると考えられる。『注釈』では「うち」を「自分自身の家」と捉えられて、家内や身内といった身近な人間関係での心の掃除として解されている。そして、以下のように、そうしたことをくどいほどに話をするのは、人々の心の掃除を急ぎ、世界をたすけてやりたい一心からであると歌われている。

どのよふなくどきはなしをするものな
たすけたいとの一ぢよばかりで (七号 26)

一れつのむねのうちよりしんぢつに
はやくわかりた事であるなら (七号 27)

それから八月日よろづのしはいする
なにかよろづのたすけするぞや (七号 28)

このたすけはやくりやくをみせたさに
月日の心せくばかりやで (七号 29)

なにもかもこのせきこみがあるゆへに
むねのうちよりそふぢいそぐで (七号 30)

このはなしどこの事やとをもうなよ
みなめへへのうちのはなしや (七号 31)

めへへにむねのうちよりしいかりと
しんちつをだせすぐにみへるで (七号 32)

また、以下のように、七号の95では心の掃除が陽気な「つとめ」を教える段取りの一つであることが歌われている。

なにもかもよふきとゆうハみなつとめ
めづらし事をみなをしゑるで (七号 94)

たんへとつとめをしへるこのよふ
むねのうちよりみなそふぢする (七号 95)

あとなるハにちへ心いさむでな
よろづのつとめてへをつけるで (七号 96)

こうして、五号から七号を見てみると、心の掃除が「つとめ」の手を教える段取りの一つとしてなされていること、また、胸の内の掃除が、身内や家内といった人間関係において論されていることなどが分かる。これまでの「やしきのそうじ」や「しんはしら」(真柱)を迎えることも、広く言えば「つとめ」を通した「世界だすけ」の準備ともいえよう。人々の心の掃除は、そうした具体的な段取りとともに進められている。

ところで、「つとめ」をするために、あるいは「つとめ」をすることによって我々は心の掃除を企図するのであるが、そうした心の掃除が他でもない「銘々の“うち”の話や」と述べられるとき、思い出される先人の話がある。それは『改訂正文遺韻』の「別席傍聴漫筆・清水先生」にある次の箇所である(一部現代仮名遣いと漢字に直す)。

今までも、手を合わせて、拝むと言う事は、教えてある

と仰っしゃるが、今までの信心は、手を合わせるまでの信心で、その理が分からん。此の度は、その理を教えてください。どういふ理なら、五の指を合わせて五分々々という。五分五分々々というは、夫婦の中も、互いにたてあうという理である。

このように教えられて、続けて「夫婦が互いに立て合っていないければ、いくら手ばかり合わせて拜んでも、何も受け取る理はない」と論されている。「つとめ」の手を教えても、心がなければ「つとめ」にはならないのだろう。また、心から拜んでも、教えを守らなければ、それもまた信心のある「つとめ」にはならないのかもしれない。合わせた手が「つとめ」になるように、心の掃除が促されているのだといえよう。

次に八号を見ていくと、60からの一連の歌の中に「そふぢ」という言葉が出てくる。まず、60ですべての人間は親神の子どもであり、可愛くて仕方ないことが述べられ、その上で、それぞれの心にほこりがたくさん積もっており(61)、それをすっきりと掃除しないことには親神がどれほど心を掛けようとも(62)、と詠われ、さらに、親神は我が子である人間の行く末を心配しているが、その胸中を誰も知らない(63)と続けている。62の文末の接続助詞「とて」(といつても……)が残す余韻に、親神の無念さが伝わってくる。

月日にハみな一れつハわが子なり
かはいゝばいをもていれとも (八号 60)

一れつハみなめへへのむねのうち
ほこりいゝばいつもりあるから (八号 61)

このほこりすきやかそふぢせん事に
月日いかほどをもふたるとて (八号 62)

月日よりこわきあふなきみちすじを
あんぢていれどめへへしらすに (八号 63)

また、81からの歌では、「そふぢ」という言葉に2つの意味が重ねられて使われていると考えられる。すなわち、親神が、これからは人間の身の上に障りをあちらこちらに見せてそれぞれの心を手入れすると述べられた上で、ぢばに帰って来たならば、そうした身の障りに照らし合わせて、何か符合するところがあればやく掃除するように、と詠われている。何を掃除するのか。続く83で、掃除したところを歩いて立ち止まってそこに甘露台を、と詠われていることから、掃除するのは甘露台が据えられるべき場であり、それは物の上からの掃除と心の掃除の両義的に解される。

このさきハあゝちゝちにみにさハリ
月日ていりをするとをもゑよ (八号 81)

きたるならわがみさハリとひきやハセ
をなじ事ならばやくそふぢふ (八号 82)

そふぢしたところをあるきたちとまり
そのところよりかんろふだいを (八号 83)

したるならそれよりつとめてをそろい
はやくかゝれよ心いさむで (八号 84)

こればかりどこたづねてもないほどに
これにいほんのしんのはしらや (八号 85)